

仮設住宅の継続的な支援の実践 in 釜石

12月27、28日にかけて私たちは岩手県釜石市にある甲子 B 仮設団地におけるボランティア活動を行った。27日は、翌日行われる餅つき大会の用意を主に行った。甲子仮設の人たちもやはり高齢者が多く、杵と臼のような重たいものを運ぶ力がなくなってきており、力仕事をメインに手伝わせていただいた。一緒に仮設に訪れた女の子たちも、もりもり力仕事をこなしており、頼もしい仲間たちだなと感じた。力仕事を終えると、豚汁の材料を買いに行き、その材料をおばあさんたちと一緒に切って和やかなひと時を過ごした。おばあさんたちは私の何倍も生きてきているだけあって、やはり知識が豊富だった。豚汁の作り方ひとつにも、知らない技術が多く使われており、それらを伝授してもらった。基本的にクールなおばあさんたちが多かったが、私たちのような若者に何か教えてくれる時の顔は心なしか嬉しそうに見えた。それはおじいさんたちにも言えることだった。餅つき大会のイベントでは「だだすこだんだん」さんによる獅子舞の披露、仮設住民の方々によって結成された合唱グループの合唱会などが行われた。仮設の自治会のメンバーの一人に、もともと催し会場の照明などを設置する仕事をしている方がおり、事前打ち合わせでこれらのイベントが行われることを知った途端にとっても生き生きとした。私はほぼ付きっきりでおじいさんの手伝いをさせていただいたのだが、おじいさんの所有している軽トラックのトランクには、専門の知識がないといじるのが怖いくらいの精密機器が山積みになっていた。その山積みになった機器の中から必要な機器を取り出すのを手伝った時、触れたものを全て解説してくれた。私は機械が好きなのでいろいろと話してもらった。おじいさんはとっても楽しそうに話して下さって、私も嬉しい気持ちになった。ただ話しているだけなのに嬉しそうにしてくれると、これだけでも来たかいがあったのかなと感じた。また、高齢者は多くの方が年季の入った技を持っているなど感じた。ある人は長年やってきた主婦の知恵、ある人は長年の経験からあらゆる機械を使いこなす技術、ある人はバラバラな出身地の人たちだらけの仮設住宅に自治会を立ち上げ引っ張ってきたリーダーシップを持っており、その技はそれぞれ汗水がしみ込んだ洗練された素晴らしいものだった。私はもっと多くの人の技を見ていきたい。

住民の中には私と同じ二十歳の男性がいた、私も遊びに行っているわけではなかったのだけれどじっくりとお話はできなかったのだが、なにか感じるものがあり、次に行ったときは何とかのみにでも行きたいと思っている。遠い土地に同い年の友達があまりいないので、とてもうれしく感じた。仮設住宅には十代二十代の人が少ないため、やはり退屈しているようだった。その点でも私たち若者が訪れる意味はあるのかもしれない。

このように、その土地の人々の特色や一人一人の性格、特技などを知っていくことで、甲子仮設団地に愛着がわいてきた。私は見知らぬ人を本気で助けたいなんて思えるほど優しい人間ではないと思う。しかし、何度か甲子仮設に訪れていく中で私の顔を覚えていて

くれる人も出てきて、いつも孫と接するかのように優しい対応をしてくれる仮設のみなさんには感謝していると同時に、愛のような心が生まれてきた気がする。甲子仮設の人が困っていたら私は助けたいと思うし、何もなくても顔を出していろいろな話をしたい。地域に関わる上で愛着というのはとても大切だなと感じる旅だった。

